

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育成する初等社会科授業づくり —6年生歴史学習の授業，単元，カリキュラム—

眞鍋 雄大

1 問題の所在

小学校学習指導要領解説社会科編の第6学年の内容(2)では、「(エ) 源平の戦い，鎌倉幕府の始まり，元との戦いを手掛かりに，武士による政治が始まったことを理解すること。」「(オ) 京都の室町に幕府が置かれた頃の代表的な建造物や絵画を手掛かりに，今日的生活文化につながる室町文化が生まれたことを理解すること。」とある。この通りに学習することによって，鎌倉時代は政治や外交，室町時代は文化を学ぶというように，各時代で学習するスコープが分断された状態となっている。同様に，「(ウ) 貴族の生活や文化を手掛かりに，日本風の文化が生まれたことを理解すること。」と示されていて，平安時代も文化を学ぶ時代とされている。平安時代や室町時代が，文化のみを時代の特色として示すものかと言えば，そうではない。それぞれの時代に政治があり，外交があり，それを受けて文化が存在する。このように考えて，人物を中心とする小学校の歴史学習の特性に応じて，平安時代末期の平清盛から室町時代の足利義満までの人物を並列的に取り上げる。そして，外交史を取り扱う「国際」のスコープで，別々の時代で学習される4人の人物を比較しながら，政治や外交について考えて評価していく単元を構成していく。

2 平清盛，源頼朝（北条政子），北条時宗，足利義満と外交について

山内晋次（2012）によれば，政治史，制度史，社会経済史等の国内に関する歴史研究に対して，外交史は文献が各国に散見していて研究があまり進んでいないのが現状である。その中でも通説的な枠組みとして通用しているのが，日宋貿易研究の第一人者として日本の国際関係史研究を牽引した森克己（1978）の研究がある。森の研究を基盤として，それを批判していく形で，当代の国際関係史は進展してきている。今回の単元で扱う人物と外交について概要を以下に示す。

平清盛

父忠盛が始めた日宋貿易に対して，息子の清盛は，莫大な利潤が生まれることを理解していた。厳島神社や大輪田泊の改修，音戸の瀬戸の開削等，瀬戸内海航路を整備して，輸入品の消費地となる京都に近い大輪田泊への宋船の誘致とそこでの貿易の振興などの積極的な対外政策を進めた。このようにして平氏は日宋貿易に対する支配・

統制を通じて得た莫大な貿易利益が平氏の財政基盤となったと考えられているのが通説である。山内（2012）は、大輪田泊の宋船の入港記録の少なさと、日宋貿易の証拠となる博多遺跡群の大量出土品との違いから、大輪田泊に対する歴史像の見直しをしている。大輪田泊は、最大の対中国貿易拠点であるハブポート博多から、平氏政権の絶頂期というごく短期間、一時的に瀬戸内海に伸びた支線＝大輪田泊という歴史像である。また、遣唐使の廃止以降も、盛んに貿易が行われていた博多商人（在日本の宋商人）に対して、平氏の貿易への関与はあくまでも、時どきの貿易船に相乗りのかたちで大口の出資をする諸権門のひとつではないかと結論づけている。

源頼朝（北条政子）

小学校の教科書を見渡しても、源頼朝・北条政子が外交をした形跡は見当たらない。おおよそが源平合戦で平氏を倒した後、鎌倉に幕府を築き、土地を仲立ちとしたご恩と奉公という主従関係によって御家人を統制して、承久の乱を収めたという流れである。それでは、本当に外交はなかったのだろうか。中村翼（2010）は、13世紀後半の3代目執権北条泰時の時代に、鎌倉における貿易陶磁の出土が増大することから、初期の都市鎌倉の消費生活の規模が小さくて、唐物需要が小さかったことで、貿易の必要性がなかったと結論付ける。そのように考えると、教科書に幕府成立時に示される鎌倉幕府の想像図は半世紀後あたりの姿であり、天皇や貴族の住まう京都に対抗する武士の新しい都市である鎌倉は、緩やかに発展していったと言える。

全く外交がなかったかと言えば、13世紀後半から貿易が隆盛を迎える礎となるものがあつた。それは、入宋僧の先駆けとなる栄西と博多商人の結びつきである。入宋によって、宋では禅が主流であることを知った栄西は、新たな禅宗を立てようと帰国して博多や京都を中心に布教活動を始めたが、旧仏教界から理解が得られないままであった。そこに目を付けた振興の鎌倉幕府が保護して、栄西は鎌倉で布教活動に成功する。鎌倉幕府は栄西を単に一宗教家として扱うのではなく、二度の入宋を遂げて大陸の広い知識をもち、貿易ネットワークのある博多商人とのつながりをもつ者として重用した。これ以降、鎌倉幕府は入宋僧を介して博多商人とつながり、貿易を推進していく。また、栄西らによって日本の安価で良質な木材が宋に寄進され、木材が枯渇していた当時の宋にとって、日本との貿易は奨励されるものであり、ますます日宋貿易は盛んになっていく。

北条時宗

十三世紀に入って、遊牧騎馬民族のモンゴル（蒙古）が勃興すると、東アジアの国際関係に大きな変化が生まれた。モンゴル諸部族はチンギス・ハンによって統一され、4代目ムンケ・ハンの治世にいたって最大の判図に達した。皇弟のフビライ・ハンが東方に元を建て、朝鮮半島の高麗を属国につけて、南宋を滅ぼそうとした。その際に南宋の経済的基盤となっていた日宋貿易の相手国となる日本に対して、日宋貿易の停

止を求めた国書を送ったのが、小学校の教科書にも記載される「フビライの国書」であり、この時の幕府の実質的権力者が八代執権の北条時宗である。外交を担当する天皇家と幕府は連日評定を重ねて、片牒を送らぬことを決した。天皇家は伊勢神宮を始めとした全国の諸寺社に異国降伏の祈祷を行わせ、幕府は元からの侵攻に備えて、九州および中国・四国地方の守護達に警戒を厳重にすることを命じた。幾度となく元から使者が来日したが、基本的にこの姿勢は変わらず、文永の役へとつながっていく。

文永の役では元の見慣れぬ集団戦法や火薬武器に苦戦を強いるが、元は博多・箱崎を侵しただけで、大宰府を目指して進撃することなく、また陸上に陣地を構えることもなく、船を引き上げた。一度目の侵攻を外交カードに元は使者を鎌倉に送るが、幕府は使者を斬首して、元に対する敵対の姿勢を崩さなかった。幕府は次の侵攻に備えて、六波羅探題や異国警固番役の強化、防塁の築造等、様々な防衛対策を講じて、幕府の西国支配をより強大なものへと変化させる。一方、元は文永の役後に南宋を降伏させて中国全土を掌中に収め、2度目の侵攻となる弘安の役が始まる。文永の役の5倍の戦力が投入されたが、防塁や日本軍の小舟による戦法、暴風雨等によって、幕府軍は防衛に成功する。

元の二度に及ぶ日本遠征は失敗に終わり、その後も緊張が暫く続いたが、1294年に世祖フビライが死去すると、武力侵攻の方針は事実上放棄され、日元間の交流が再び活発になり、多くの禅僧が入元した。それに伴って経済的な取引も活発になり、日元間に、高麗を仲介として盛んな交易活動があったことが、1976年に韓国の新安沖で発見された沈没船から大量の日本向け物品が見つかったことから、明らかになる。この新安船は、1323年に陶磁器、銅銭などを大量に積んで日本に向かっていた船であった。五味文彦(2016)は、「こうしてみると、蒙古襲来は海外交流を停滞させたのではなく、むしろ促進したというべきかもしれない。貿易の利にひかれ、中国の文物・文化に魅せられていた日本人はもはや、東アジアの世界から孤立することはできなかった。」と論じている。

足利義満

国内で公武の支配者として地位を固めた義満は、博多商人を使者として明に進貢し、明側より「日本国王」に冊封されることに成功した。冊封を受けることによって莫大な利益を生むだけでなく、明皇帝という新たな権力を後ろ盾として、自己の国内での地位や権威を高めたり、唐物を優先的に取得し、文化的に優位に立ったりすることが目的であったと考えられる。

当時、明政府は海禁によって私貿易を禁止していて、それに対して私貿易船団は、輸出品の日本刀や爆薬で武装して政府に反抗していた(倭寇)。義満は、西国の有力な守護や武士達を通じて、倭寇抑圧をはかろうとただけでなく、遣明船に明皇帝から日本国王に与えられた勘合を必ず所持し、それを用いて倭寇船と遣明船を区別する勘

合貿易を行った。日本からは硫黄・刀剣等の軍事的な意味合いの強いものが輸出され、明からは生糸、陶磁器、絵画などが輸入され、座敷飾りや茶の湯に用いられる道具として珍重された。

3 単元構成

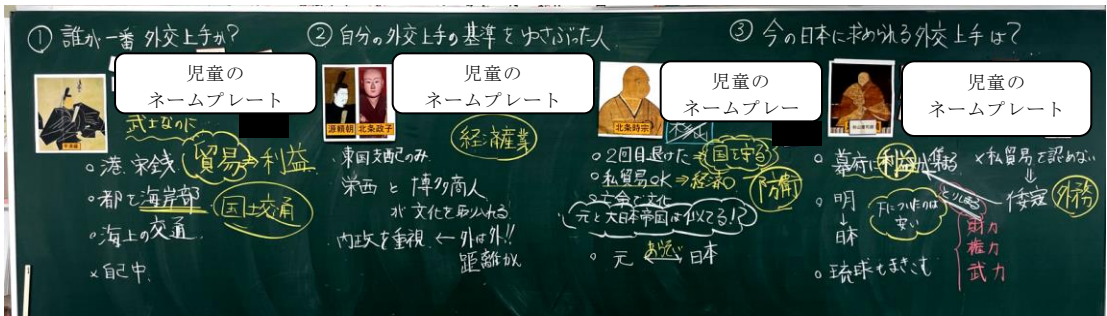
単元名【平清盛、源頼朝（北条政子）、北条時宗、足利義満の中で、だれが一番外交上手であったか？】（全6時）			
学習指導要領との対応と、見方・考え方	(2)ア(エ)源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いを手掛かりに、武士による政治が始まったことを理解すること。 見方・考え方： 「日宋貿易」「モンゴル帝国」「元寇」「日明貿易」 「位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）」		
探究に向けた環境づくり	1. 歴史学習を現在の日本に生かすことを記述した児童の振り返りを紹介する。 2. ウクライナ危機、G7サミット、処理水海洋放出に対する中国の水産物輸入停止から、現代的課題に外交があることに気付かせる。 3. 卑弥呼、聖徳太子、聖武天皇の外交を想起させる。 4. 中世の外交史の年表資料を提示する。 5. 外交上手の基準（政治、経済、文化）を確認する。		
CQ（1時）	平清盛、源頼朝（北条政子）、北条時宗、足利義満の中で、誰が一番外国と上手に付き合ったか？		
SQ1（2時）	SQ2（3時）	SQ3（4時）	SQ4（5時）
平清盛が行った日宋貿易は日本を豊かにしたのか。	関東の鎌倉幕府は、外交ができたのか。	なぜ北条時宗は、元からの使者を断り続けたのか。	足利義満が行った日明貿易は日本を豊かにしたのか。
PT 日宋貿易は日本にとって利益があったのか、政治・経済面から評価する。	PT 鎌倉幕府の外交における地理的な弱点から、承久の乱を意義付けする。	PT 蒙古襲来の背景とその後の日元貿易から、幕府の判断が妥当であったか評価する。	PT 日元貿易と日明貿易の違いから、日明貿易の特徴を読み取り、日明貿易は利益があったのか、政治・経済面から評価する。
資料 ・教科書「武士の政治の始まり」 ・日宋貿易、宋銭	資料 ・初期鎌倉幕府の仕組み ・承久の乱前後の勢力図 ・承久の乱 ・ご恩と奉公 ・鎌倉幕府の立地 ・源氏と北条氏の系図	資料 ・モンゴルの広がり ・元からの国書 ・蒙古襲来絵詞 ・元寇前後の日本と周辺国の関係	資料 ・足利義満の頃の日本と周辺国の関係 ・倭寇図巻 ・明からの国書 ・NHK for School「中国との貿易（平安時代～室町時代）」
総括的PT（6時）	CQ「平清盛、源頼朝（北条政子）、北条時宗、足利義満の中で、だれが一番外交上手であったか？」について、資料を根拠にしてグループで話し合う。		
発展的PT	自分自身の外交上手の基準を一番揺さぶった人物は誰であったかについてグループで話し合う。		
社会に向けた知的な行動	現在のリーダーに求められる外交上手は誰であるか、4人を国務大臣に置くなら何大臣となるかについてグループで話し合う。		

【第4時】 大国である元を相手に、「なぜ北条時宗は元からの使者を断り続けたのか？」という課題を立てた。課題解決のために、まず、「2度の戦いの違い」を示すことで、戦いを生業とする武士の棟梁である北条時宗像を浮かび上がらせた。そして、「元寇前後の日本と周辺国の関係の違い」を示すことで、元が日本の貿易相手国である南宋の敵であること、南宋が滅んだことで南宋の文化が日本に流入したこと、元と戦ったにもかかわらず貿易は続いたことについて抑えた。



授業内では、教師が元の国書に対して卑弥呼だったらどうしたか、元が攻めてきた時に貴族だったらどうしたかと問うたり、児童が南宋と日本の関係を現在の日米関係に重ねた発言をしたり、鎌倉・室町時代を扱う中で、様々な時代を往還しながら学習を進めていった。児童の振り返りを見ると、元と戦ったにもかかわらず貿易が続き、文化が流入してきたことへの驚きと共に、北条時宗が国を守るために戦い抜いたことを評価していた。子ども達の「戦いをした＝外交ができない」という既成概念が揺さぶられていた。

【第6時】これまでの4人の学習を踏まえて、「誰が一番外交上手か？」と問い、一番上手だと思う人物の横にネームプレートを置いて、その理由を交流した。同様に、「自分の外交上手の基準を揺さぶった人物は誰か?」「今の日本に求められる外交上手は誰か?」と問い、それぞれの理由を交流していく中で、歴史学習と今日の社会における諸課題との接続を図った。



「誰が一番外交上手か?」という問いに対しては、足利義満、平清盛の票数が多かったものの、源頼朝や北条時宗も少数ながら票を集めた。前者は貿易という経済的活動を評価したものであり、後者は外交の基盤となる内政、侵略者から国土を守った防衛を評価したものである。

「自分の外交上手の基準を揺さぶった人物は誰か?」という問いに対しては、源頼朝と北条時宗の票数が多かった。源頼朝が臨濟宗の栄西を重用したことにより、南宋とのつながりを持つ基盤を固めたこと、平清盛は上記の理由と同様であった。この時点で子ども達は、あまり外交のイメージがなかった源頼朝や北条時宗にも、平清盛や足利義満と同様に外交のイメージを持つことが出来ていると判断したので、次の発問をした。

「今の日本に求められる外交上手は誰か?」という問いに対しては、平清盛と足利義満の票数が多く、昨今の景気の悪さや物価高を受けて、貿易で富を得ることを評価した意見が多かった。源頼朝は内政、北条時宗は国防を評価した意見が出た所で、児童から「北条時宗は防衛大臣に置けばよい。」と発言したことから、「4人がどの国務大臣に適しているか?」という議論になった。平清盛は瀬戸内の交通を整えたことから国土交通大臣、源頼朝は武士が支配する仕組みを整えたことから経済産業大臣、北条時宗は侵略者から国土を守ったことから防衛大臣、足利義満は日明貿易によって巨額の富を得たことから外務大臣というような、それぞれの歴史人物の特徴を捉えながら、現在の国務大臣に当てはめていく活動となった。授業終了後も他の時代の人物で組閣して遊んでいる児童が数人いた。児童の振り返りを見ると、「外交で比べることが楽しかった。」「政治や経済など他の視点でも人物を比べてみたい。」等の意見が多かった。

4 カリキュラム例

長谷（2022）によれば、スコープを分けることで発達段階に適したスコープの選定に役立ったり、一単元を作る際に、一つの領域から別の領域へと順序付けることにも役立ったりするとある。先に示した事例は「国際」のスコープを固定したものとして考えられたものであったが、以下に示すように、スコープを横断させることを基本としながら単元をつくり、それらをつないで6年生歴史学習のカリキュラムを作成した。

時代	SQ	PT	資料	社経	環文	健安	国際
中世（平安く安土・桃山時代）	①CQ「聖武天皇が行った仏教の力で国を治めようとしたことは成功か、失敗か？」						
	①大化の改新と新しい政治の仕組みは成功か、失敗か？	聖武天皇が政治をしていたころの、貴族と農民の暮らしぶりの違いから評価する。	・大化の改新と新しい政治の仕組み・平城京の様子（想像図） ・貴族、下級官人、庶民の食事 ・平出遺跡の写真、貧窮問答歌	◎			
	②大仏をつくってみよう。	大仏の体のパーツをつくり、大仏づくりと大きさを体感する。	・大仏の大きさ ・大仏の原材料				
	③なぜ聖武天皇は東大寺の大仏づくりにこだわったのか？	大仏造立の意図を、当時の国内と国際情勢に注目して推測する。	・大仏のつくり方と健康被害 ・大仏造立の詔、聖武天皇の頃の年表、国分寺の造営 ・龍門石窟の大仏、遣唐使のルート ・行基について	◎	○		○
	④なぜ聖武天皇は危険をとまなう遣唐使を送ったのか？	遣唐使船の想像図から危険を顧みず行った意図について、正倉院の宝物と鑑真に関連させて説明する。	・遣唐使の派遣 ・正倉院の宝物 ・鑑真の来日 ・NHK foe School「鑑真～仏教の発展～」			○	◎
⑤総括的PT「聖武天皇が行った仏教の力で国を治めようとしたことは成功か、失敗か？」についてグループで話し合い、聖武天皇の政治に対して点数をつける。							

5 最後に

学校の〈ソト〉にいる他者とどのように出合わせるか。歴史学習では、子どもが史料をもとに、時空を超えた学校の〈ソト〉にいる他者と出合う。よって、発達段階に応じた適切な史料の準備や、その史料から思考する力が、子どもだけでなく教師自身にも求められ、学習デザインが難しい。しかし、そこを乗り越えてこそ、学校の〈ウチ〉にいる他者（友だちや教師等）がまったく異なった解釈をする〈他者〉へと変貌したり、現在の自分自身すら〈他者〉と捉え、変化したりすることができる。そのような学校の〈ウチ〉にいる〈他者〉同士が、やがて学校の〈ソト〉に広がる社会を創っていく。そう信じて、社会科教育を進めていきたい。

【主要参考文献】

- ・森克己・沼田次郎編『対外関係史』山川出版社、1978年。
- ・山内晋次「平氏と日宋貿易—通説的歴史像への疑問—」神戸女子大学古典芸能センター編『神戸女子大学古典芸能センター紀要』2012年、pp.68-82。